



# ともしび

2000 - 1

(No. 506)

日本伝道福音教団 機関紙

発行所・長岡市緑町1-38-50  
発行者・堀 肇  
(毎月10日発行・定価50円)

救いの証

## まことの神を知って

高田聖書教会

山田敏雄



一九三九年ごろ上京して始めて友人と夜の神田神保町の古本屋街を歩きました。とある街角を曲りましたら十七・八才位の女性の方が大声を出して道行く人々に話かけております。私は何の事やらわからず友人に聞きましたら、救世軍でイエス・キリストの事を話しておるのだといいます。イエス・キリストの名は知っていました。救世軍の名ははじめてです。うら若い女性が雑踏の街で堂々と福音を説いていたこと今でも忘れることは出来ません。

私の少年時代は、天照大神を皇室の先祖とし天皇を現人神として人格化した時代でした。明治維新政権により神道が国教化されてキリスト教は特にきびしい弾圧を受けてその影響が残っておりまして。学校の登下校には奉安殿に最敬礼をし、全校朝会には皇居に向って最敬礼をさせられた一時期もありました。年数回行われた講話は専ら大楠公や日清・日露の役の事で国威の高揚を目的とされました。一九七二年ごろ大学生の長男が夏休みに帰省し同町内のリーアイブン宣教師の自宅にもたれている集会に度々私を誘いました。私は前述のような時代に教育を受けたものでキリスト教に関心はなかったのですが、たまには礼拝に出席してみました。

リー先生は教会員の家庭をも訪ね共に祈ることもされました。或る日先生は幻燈機を持って我が家に来られました。私の家では六畳の居間に押し入れがあつてその隣りが三尺の物入れになっていました。その上に棚を作つて神棚としておきます。先生はその神棚の下の押し入れの開き戸に大洋紙をはつて「天地創造」という幻燈を映しました。まさに、日本の神様と天地創造主の対決という状況です。

先生はどのうよなメッセージをされたか憶えていませんが、神棚の下に「天地創造」の幻燈をされたことは忘れられません。

創世記の冒頭に「初めに、神が天と地を創造した。」とあります。最初は何んと詩的なことばだなど思いましたが、時間が経る毎に何とすばらしいことばなのかと思ひます。万物の始まりはすべて神から出発している。形もなく、何もないところから生命が誕生しこの世界を形成し、そして神のかたち人に造られ、すべてのものの支配をゆだねられた。

私は聖書を聞く度にこの創世記の冒頭を読み返しています。私が今まで信じていた神とは何んだつたのだろうか。人間が人間を神として祭つたものを拝していたのではなかったか。

「主は私を生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあつても」詩篇のこのみことばはイエスさまを知つた喜びをひしひしと感じています。

一九八五年夏、直江津海岸にて家内と共に、教会の兄弟姉妹、長男から祝福をうけ、塚田牧師先生から洗礼を授けて頂きましたことを神様に深く感謝いたします。